360度ライオット・ウォーク

1)メープル・ツリー広場

いま、皆さんがいるのが、バンクーバー発祥の地、メープル・ツリー広場です。ここはマスクィアム族、スコーミッシュ族、ツレイワトゥス族ら先住民のシーズナル・キャンプだった場所で、『ルクルキ』とも呼ばれていました。

Ta newyap n síiyaẏ. Chayap wa lhílhx̱i7lsh na7 tkwa Lek'lék'i úxwumixw. Taẏ temíxw swa7 tl'a Xwemétskwiyamulh, Selílwitulh iy Skwx̱wú7meshulh . Na tiná7 tl'a tkwa Lek'lék'i n swá7am-cht ímen. An chet wenaxws ti temíxw, ti stakw, ti smanít iy i7x̱w ta S7ukw'ukw'íńexw. Wenáxwstumiyap ti temíxw ímen. Wa Chayap yuu. Tiḿá tkwétsi n sníchim.

[translation from Squamish] Hello my friends. You are standing in the village of Lek'lék'i. This land is Musqueam, Tsleil-Waututh and Squamish. Our ancestors are here in this village as well. We deeply respect this land, these waters, the mountains, and all the animals. We ask you to respect this land too. Walk gently.

マスクィアム族はフレーザー川南部に住んでいました。ネイティブの言語でセスナムとマァレィと呼ばれます。スコーミッシュ族はスナークと呼ばれるフォルスクリークの入り口と、ホファイホァイならびにタユーシュと呼ばれるバラード湾の突端に住んでいました。ツレイワトゥス族はバラード湾とインディアン・アームの間にある、現在のベルカラに住んでいました。かつてスペイン人たちがカナルデササマトと名付けた場所です。何千年もの間、彼らはこのシーズナルキャンプの中でテリトリーを共有してきました。そこは太古の昔より豊かな自然の恵みをもたらし、彼らの生命を支えてきました。

この地域はまた、バラード湾からフォルスクリークまでカヌーを陸路で運ぶルートの最北にあたります。満潮時には、２つの海水をつなぐ浅い水路に沿ってカヌーを漕いで渡ることができました。

そして、はじめは動物の毛皮を求めて、ヨーロッパ人たちがやってきました。さらに鯨やウーリカーンと呼ばれる、現地の人々の間で珍重されていた脂ののったワカサギ漁を始めました。ワカサギの油は機械の潤滑油や暖を取る火、そしてランプ用油として使用

されました。彼らは伐採した木材をヨーロッパへ輸送し、もっと高速で、大きな船を作りました。その船はさらに多くの資源の運搬に使用されました。続いて、彼らは金・銀・銅を求めました。物々交換の場合もありましたが、単に奪い去っていく場合もありました。

フォートラングリーにおける毛皮貿易に従事させる目的で、ヨーロッパ人はハワイからカナカ族を連れてきました。カナカ族の中には、スクアミッシュ族の女性と結婚し、コールハーバーそばのカナカ・ランチェリーに定住した人々もいました。彼らはそこで言葉を学び、スコーミッシュの文化を持った子供たちを育てました。またヨーロッパ人は中国人労働者を雇用して土地を開拓し、鉱山を開き、鉄道を敷きました。黒人、中国人、アメリカの白人男性たちが、川の上流に金を求めて押し寄せました。

彼らはまた天然痘のような病気も持ち込みました。その結果、先住民の数は大きく減少しました。１８６２年過ぎには、生きのびたツレイワトゥス族はたったの 15 人でした。

バンクーバー初の選挙は 1886 年に行われました。市長候補の 1 人は、ヘイスティングス製材所を経営するリチャード・アレクサンダーでした。彼は自分に投票させるために 60 人の中国人、日本人および先住民族の労働者を投票所に連れて行きました。この時の白人による暴動は、アジア人と先住民が投票を許可されていなかったことが原因で発生したのです。

2 ヵ月後、「バンクーバーの大火（たいか）」が発生し、この新しい街にある木造建築をほぼ全焼してしまいました。つい先ごろの選挙によって選出されたばかりの市議会はこの事件を利用し、中国籍を持つ人が建物を修復することを禁じる条例を通過させました。そして、「労働騎士団」が中国人ボイコット運動を展開しました。中国人を雇用している、あるいは中国人に食料を売るなど、何らかの形で中国人に関わっている全てのビジネスが対象とされました。このボイコットに参加しなかった店の前には、黒い十字が描かれました。企業は中国人の解雇を求められ、代わりに白人を雇用することを強いられました。バンクーバーを去る意思がある中国人には、資金が与えられました。また、中国企業を買収する会社が設立されました。中国人労働者の中には、船着き場に連れて行かれ、“もと居たところへ帰れ”とばかりに、バンクーバー島のビクトリアへ向かう蒸気船に乗せられた人々もいました。

中国人の存在を問題だとし、それを解決しようという集会が白人たちによって頻繁に催されました。 1887 年 2 月 24 日、市役所で行われた超満員の集会では、約 300 人の白人男性達が、怒りに任せてコールハーバーの中国人労働者たちのキャンプに乗り込みました。労働者たちは、もともと森だった現在のウエストエンドの木を伐採するために雇われていたのです。そこで、白人男性たちは労働者を襲撃しました。テントをなぎ倒し、いっさいがっさいの寝具や衣服、食べ物を燃やしました。

次のスポットは、南へ向かい 2 ブロック目の、キャロル通りとヘイスティングス通りの交差点、北東の角になります。

2)キャロル通りとヘイスティングス通りの交差点 Carrall and Hastings

この、キャロル通りとヘイスティングス通りの交差点は、バンクーバーで最初の娯楽地区の中心でした。ここには数軒の劇場と沢山のバーがありました。

西側の向かいには、パイオニアスクエアがあります。これは、現在ピジョンパークと呼ばれている場所の正式名称です。 1932 年にバラード湾からフォルスクリークへの鉄道路線が変更されたときに造られました。

南西の角には、1891 年から 1958 年にかけて運営されていた BC 電鉄路面電車の発着場がありました。最盛期には、約 1 万人の人々が 1 日に 2 回、バンクーバーからチリワック、スティーブストン、そしてニューウェストミンスターとの往復に利用していました。

ヨーロッパからの移民コミュニテイが力を持ち、その経済的利益が優先されました。それにより有色人種のコミュニティはより条件の悪い地域へと追いやられ、民族ごとのゲットーが形成されました。

このような例は当時よく見られるものでした。反アジア、反先住民感情がはびこっていたのです。当時の人々が“アジアティック・エクスクルージョン・リーグ”と呼んだ「アジア人排斥連盟」が西海岸沿いの全主要都市で結成され、“アジアティック”と呼ばれた移民を制限したがっていました。日本人、中国人、韓国人、フィリピン人、そして南アジア人。南アジア人とは、本来はシーク教徒であるにもかかわらず「ヒンドゥー教徒」と呼ばれたパンジャブ出身の人々が中心でした。

次のスポットは、東へ向かい 1.5 ブロック先の、ヘイスティングス通りの北側、イースト・ヘイスティングス 139 番地です。

3) イースト・ヘイスティングス 139 番地（バルモラル・ホテル西側）

キャロル通りとメイン通りに挟まれた、ヘイスティングス通り沿いの 2 ブロックは、市内で最も発展した商店街のひとつでした。ほとんどの店舗は白人によって運営されていましたが、中国人のビジネスも 9 件ありました。

通りの向かい左側に 650 人収容を誇るヴォードビル・スタイルのパンテージ劇場がありました。暴動の時にはまだ建設中でした。設立者アレクサンダー・パンテージは、「ユーコンの炎」として知られたダンサー、クロンダイク・ケイトから融資を受けて、1901 年にユーコンで娯楽ビジネスに参入しました。ほどなく彼はハリウッドからバンクーバーにいたる太平洋側のあちらこちらに劇場を所有しました。

1907 年には失業率が上昇し、経済は低迷しました。この年の 10 月までに 8 千人以上の日本人移民が到着しました。これは前例のない増加でした。 グランド・トランク・アンド・パシフィック鉄道は、ブリティッシュ・コロンビア州北部での線路敷設に 1 万人の日本人労働者をカナダに入国させようと、オタワの連邦政府に働きかけました。人種間の緊張が広がりました。

ブリティッシュコロンビア州法務長官ウィリアム・バウザー氏は、アジア人が州に入るのを厳しく制限する「移民条例」を提案しました。しかし、主に日本との国際条約に違反しているという理由で、副知事による承認には至りませんでした。

7 月には、ハワイから千百人を超える日本人男性が汽船クーメリック号に乗って到着しました。これは、ニッポンサプライカンパニーとカナダ・パシフィック鉄道との間の労働供給契約に基づいたものでした。また、ハワイ諸島で発生した腺（せん）ペストの集団感染を免れるという目的もありました。

その後の 9 月 5 日には、ワシントン州の南 90 キロメートルにあるベリンハムで、約 500 人のパンジャブ人製材所労働者が白人労働者に襲われ、町の外へ逃れました。北へ向かった人々は、彼らが大英帝国の一員であるという理由だけでカナダ入国を許されました。彼らの多くがバンクーバーに到着した時、まさにバンクーバー暴動を目撃することになったのです。

次のスポットは、ヘイスティングス通りを東へそのままメイン通りまで移動し、メイン通りを渡り、そのままメイン通り沿いを南へ半ブロック進んだ場所、４３８番地です。

4）ヘイスティングス通りから、メイン通り沿いに南へ半ブロック進んだ場所

通りの向かい西側にみえる、カーネギーコミュニティセンターの左側に位置するのが、オールド・マーケット・ホールの跡地です。1897 年から 1929 年にかけて、その二階にバンクーバー市庁が置かれていました。一階はパブリック・マーケットになっており、2 千人規模の講堂としても機能していました。

1907年、保守系労働組織であるバンクーバー商業・労働協議会が、アジア人排斥連盟の地方支部を設立しました。 400人の男性が8月12日の最初の会議に出席しました。それはサンフランシスコをはじめとする西海岸全域で行われた、日本人・韓国人排斥連盟をモデルとしていました。彼らは「白人の国」、そして法によるアジア人労働の禁止を提唱し、必要とあれば暴力も辞さない構えでした。バンクーバー市長アレクサンダー・ベスーン、そして数人の市議会議員が、多くのクリスチャン指導者とともに、その創立メンバーでした。「労働騎士団」が主なスポンサーでした。

アジア人排斥連盟は直ちに最初のイベントを開催しました：9月7日土曜日、レイバー・デイの後の週末です。パブリック・デモンストレーション、パレード、そして市役所でスピーチを行いました。

群衆は午後7時に、現在のダウンタウンにあるラーウィル公園として知られるキャンビー・ストリート・グラウンズに集まりました。先頭に立つE.ブラウン少佐のすぐそばにビーティ・ドリルホール連隊、ベスーン市長とその妻を含む騎兵隊、そして労働者や教会の指導者たち。その後ろには五千人もの人々が続きました。多くの人々は「白人のカナダを取り戻せ」と書かれた白いバナーを振りかざしていました。彼らはヘイスティングス通りに進み、そしてオールドマーケットホールにあるバンクーバー市庁をめざしました。

彼らがホールにたどり着くまでに、さらに何千人もの人々が行進に参加しました。推定人数は当時の人口の3分の1以上、2万５千人から3万人でした。スピーチを聞くために市役所に入ることができたのはごく一部の群衆だけだったので、ホールの外の群衆にスピーチの内容を伝えるために伝達係が行ったり来たりしました。カナダからアジア人を永久に排除することを連邦政府に要求する決議は、この新しく形成された組織によって熱狂的に可決されました。ゲストスピーカーには、聖職者、弁護士、政治家、そしてニュージーランドおよび米国の反アジアの活動家が含まれていました。シアトルの反日本・反韓国同盟より、A.E. Fowler氏が登壇し、群衆たちを熱狂させました。

そして怒りに身を任せた暴徒が結成され、現在のペンダー通りに当たるデュポン通りをチャイナタウンに向かって行進しました。報道によると、パンテージ劇場の建設現場からレンガを拾った少年によって最初の窓が破壊されました。

次のスポットに行くには、そのままメイン通りを南下してください。ペンダー通りを超えて、メイン通りの南西の角になります。

5)ウェストミンスター通りとデュポン通りの交差点（現在のメイン通りとペンダー通り）

1907 年当時、この交差点で交わる２つの通りの名前はウェストミンスター通りとデュポン通りでした。ウェストミンスター通りは現在メイン通りと呼ばれています。デュポン通りは暴動の直後にペンダー通りに変更されました。この交差点はチャイナタウンへの入り口であり、そこに暴徒は群がっていきました。路上にいた地元の住民たちはあわててすぐに最寄りの建物に逃げ込みました。暴徒たちは中国人経営企業を特定し、窓を叩き割り建物を破壊しました。

東に通りを渡ったメイン通り 518 番地が、Yucho Chow 氏の写真スタジオの場所です。彼は 1906 年にウェストヘイスティングス通り 68 番地で最初のスタジオを開き、その後各地を転々としましたが、1930 年から 1949 年の彼の死まで、ここ５１８番地で過ごしました。彼の息子二人、ピーターとフィリップはスタジオを引き継ぎ、数軒先のメイン通り 512 番地にて 1986 年までスタジオを営業しました。

スタジオは「昼夜雨天問わず営業」を掲げて、何千もの家族写真、結婚式写真、ビジネスマン、そして芸能人らを撮影しました。彼は顧客が使える小道具を沢山用意していました。金の懐中時計、ネックレス、本など、顧客が裕福で成功者であるような雰囲気を与えるものたちでした。

Chow 氏の仕事において重要な点は、だれかれ別け隔てなくスタジオの運営を行ったことにあります。写真家を含む多くの 白人ビジネスは、白人でない人々を相手にしようとはしませんでした。しかしながら Chow 氏は、どんなバックグラウンドであろうと、すべての人をスタジオに暖かく迎え入れました。彼はストラスコナ地域に住んでいた、社会の周辺にあるコミュニティをすべて撮影しました。中国人、日本人、シーク教徒、黒人、東ヨーロッパ人、そして異なる人種間の家族たちです。

暴動の時、バンクーバーの黒人居住者はそれほど多くなかった為、アジア人と同じような脅威とは見なされませんでした。後に、この角から３ブロック南のホーガンズアレーとその周辺に多くの人が住むようになります。

次のスポットへは、ペンダー通りを西へ２ブロック行ってください。ペンダー通りとキャロル通りの南東の角で止まってください。

6) ペンダー通りとキャロル通りの交差点

通りを斜めに横切った北西の角に、致公堂（しこうどう）中国フリーメーソンビルがあります。満潮時には、フォルスクリークの水はデュポン通り（現在のペンダー通り）まで到達します。孫文は活動資金を募るためにバンクーバーを訪れた際、このビルの２階の寝室に滞在しました。メインフロアには北京チョップスィ・ハウスがありました。暴動の後、中国人経営の飲食店で白人女性が働くことを禁止する法律が可決されました。

北を向いて右側、イーストペンダー通り 51 番地には、ウィン・サン・ビルディングがあります。1889 年に有力な実業家イップ・サン氏のために建てられました。バンクーバーに来た多くの中国人のように、彼は広東省の、台山（だいさん）市から来ました。19 歳の時彼はカリフォルニアに渡り、そこで食器洗いや料理人として働いていました。彼はカリブーで金を探すために北へ向かいましたが成功せず、その後バンクーバーに定住しました。最初は石炭の訪問販売をしていましたが、教育を受けており英語を上手に話したので、カナダ太平洋鉄道の建築請負業者になり、一時は 7 千人の労働者の監督もこなしました。

暴徒がチャイナタウンに入ったとき、中国人達は最初驚きましたが、その後団結して反撃し始めました。暴動による死亡は記録されていませんが、死亡者が出てもおかしくない状態でした。バンクーバー・プロビンス新聞によると、カントン通りにて黒人女性が乱闘の中に飛びこんで、マックレガーという名の白人の暴動参加者を助け出し、警察が到着するまで家の中でかくまったとのことでした。

10 時になるころには、警察は勤務時間外の警官達も動員して、警官は 24 名程度になりました。それは焼け石に水で、何の効果も発揮できず、逆に警官達の安全性が危険にさらされました。消防隊も出動要請されました。

逮捕者はほとんどいませんでした。というのも、捕まった人たちを暴徒たちが助け出したからです。ある報道によると逮捕者は 24 人とされていますが、警察は本気ではなかったと述べられています。また別の報道によると逮捕者は“労働者、簿記係、きこり、働かなくてもよい男性達など、政治的な友人をほとんど持たない人々”であるとされました。結局そのうち５人だけが有罪とされ、１ヵ月から６ヵ月の間投獄されました。

地元の英語紙は、アメリカ人の労働者リーダーが暴動を誘発したとして非難しました。特別ゲストとして壇上にあがった前述の A.E. Fowler 氏、ワシントン州労働連盟総裁の Frank Cotterill 氏、シアトル出身の著名な労働リーダーである George P. Listman 氏です。しかし、中国語の新聞は地元の白人系労働組合をはっきりと非難しました。そのほとんどが反アジア活動とその扇動に加担していたのです。

ここでひとつの注目すべき例外は、「弓と矢」という名の、多民族によって構成された木材産業貿易組合です。創設メンバーの一人は、バルバドス出身の黒人、John St. John 氏でした。組合員の大多数は、キャピラノインディアン保護区の先住民族出身の労働者でした。「弓と矢」は、アジア人排斥連盟を支持した人々とは違って、数少ない反資本主義的・反人種差別的労働組合のひとつであり、Wobblies（ワブリーズ）として知られる世界産業労働組合と提携することを決定しました。

次のスポットへは、そのままペンダー通り沿いにキャロル通りを超えて西へ進んでください。そしてシャンハイアレーを左に曲がって下さい。ブロックの奥にある記念の鐘のところまで進んでください。

7) 中国系遺産の路地/上海アレー

ここ上海アレーは、隣接する広東アレーと共に、初期の中国人コミュニティの経済的および文化的中心地でした。チャイナタウンには数千人の居住者、主に成人男性が住んでいました。この通りを北に向かって右手に、シン・キュー・チャイニーズ・シアターがありました。広東オペラが上演され、孫文が中国の政治革命について満員の客席に向かって演説をした場所です。

バンクーバーデイリーワールド新聞はこのように報じました。「暴徒は日系と中国系の店舗を選別し、白人のものであれば隣接していても手をつけなかった。それは極めて計画的なものであった。」例えばコロンビア・アベニューでは、すべての中国系の店舗が破壊され、２箇所あった白人不動産業者の窓は手付かずで残されていました。

月曜日の朝、デイリープロビンス新聞は次のように報じています。「銃器店が開くとすぐに中国人たちは武装した。警察が立ち入ってアジア人に対するそれ以上の武器の売却を禁止する前に、何百ものリボルバー拳銃と何千個もの弾薬が売られた。」

南にはフォルスクリークにせり出した桟橋と、多くの中国人労働者が働いていた BC 製材所がありました。

多くの専門職はアジア人が就労できず、また、多くの店は雇用を支配している白人労働組合によってアジア人雇用を拒否するよう脅迫を受けていたために、アジア人の職業の選択肢は限られていました。

バンクーバー市が州および連邦政府とともに実行していたのは、アジア人、黒人および先住民に対する制度的人種差別としか言えないものでした。投票、専門職への就労、都市の他の地域に住む権利などを認めなかったのです。

1885 年の中国人移民法は、カナダに入国する中国人に人頭税（じんとうぜい）として一人 50 ドルの税金を課しました。1900 年には 100 ドル、その 3 年後には 500 ドルとなりました。カナダの歴史の中で他のどの人種も、出身国だけに基づいて税金を支払うことを強いられたことはありません。 1923 年中国人排斥法によりほとんどすべての中国人がカナダへの入国を禁じられ、その法律は１９４７年まで続けられました。

次のスポットは、ペンダー通りへ戻ってから右折し、ペンダー通りとコロンビア通りの交差点の北西の角です。

8) ペンダー通りとコロンビア通り、北西の角

コロンビア通りとヘイスティングス通りの角の１ブロック北に、イースト・ヘイスティングス一帯に残っている中で最も古く、唯一の木造建築があります。１８９３年に建設されました。暴動の後の 1907 年に経営者のフォングン氏は、350 ドルの損害賠償を要求しました。これには、窓の修繕費 144 ドルと、暴動の為に閉店した２週間分のスタッフの賃金が含まれていました。フォングン氏は街一番の仕立て屋で、常連客のほとんどは白人でした。

しかし、当時のほとんどの中国人労働者は、実質的には奉公人でした。彼らは直接に雇用されているのではなく、イップ・サン氏のような派遣業者と契約していました。派遣業者は、労働者の人頭税と旅費を立て替えていました。白人労働者よりもはるかに安い賃金はいったん業者に支払われます。業者はそこから自分たちの取り分と肩代わりしているお金を、立て替えたお金が完済されるまで天引きしました。数年のうちに人頭税が増えるにつれて、借金から自由になるためにかかる時間はますます長くなりました。それまで、労働者は派遣業者と雇用主のなすがままになっていました。

イップ・サン氏はイースト・ペンダー通り 104 番地から 108 番地の中国慈善協会設立に貢献しました。２階には中国語学校や病院もありました。彼は社会的および政治的活動家でもあり、革命によらず漸進（ぜんしん）的な中国の近代化を主張する中国帝国改革協会の一員でした。

Yip 氏はアヘン工場をマーケット・アリー３４番地に保有していました。暴動後、アヘンの損害賠償と、暴動の後に自衛の為購入した沢山のリボルバー銃の代金の賠償を求めましたが、その両方とも却下されました。

バンクーバー市議会が中国人の土地所有を禁止する条例を可決したとき、彼は抜け穴を見つけました。この条例には、中国人所有の会社は含まれていなかったので、彼は自分の輸出入会社であるウィン・サン・カンパニーを使って、土地を購入しました。

次のスポットへは、コロンビア通りを北へ３ブロック進んでください。パウエル通りを越えてから右折し、パウエル通り１２２番地の向かいで止まってください。

9)　パウエル通り１００番代地域

日曜の午後遅く、暴徒はウェストミンスター通りの東側、現在のメイン通りに再集結しました。そこは日本人たちが「日本街（にほんまち）」と呼んでいるエリアの入口でした。「日本街」とはその名の通り、ジャパンタウンを意味しました。パウエルストリート一帯を、日本人たちはパウエル街（がい）と呼んでいました。

日本人たちは前日の暴動を目にしていたので、ここにも暴徒が確実にやってくると考えて準備をしていました。レンガと岩を暴徒に投げるために大量に集め、銃やナイフで武装しました。

デイリープロビンス新聞はその後、「揉み合ったり怒鳴ったり叫んだりする暴徒がどっと押し寄せたために、現場の警察は全く対処することができなかった。」と報じました。

そしてこのようにも報じています。「耐えかねた日本人達は激怒し、棒きれ、ゴルフクラブ、鉄の棒、リボルバー銃、ナイフ、そして割れたガラスの瓶を道に向けてぶちまけた。」

最初の日本人は 1877 年にバンクーバーに到着し漁業に従事し、その後製材所で働きました。当初、日本政府は国民が国を離れることを奨励しませんでした。男性は戦争のために必要だったからです。日本国内の食料不足と雇用機会欠如のために、これらの規制は 1889 年に緩和されました。日本政府はその後、バンクーバーに領事館を開設しました。

日系コミュニティの野球チーム「朝日」は、日系の人々が平等や尊敬の念を勝ち取ろうとする戦いの象徴的な存在となりました。チームは一生懸命、頑張り、我慢といった労働倫理の原則を柱としていました。敵も味方も「朝日」の奮闘を応援し始め、英語メディアは彼らの巧みなプレーを称賛しました。しかし、彼らの呼称はいまだ“ジャップ”や“ニップス”であり、彼らがカナダ人であるということは決して認めませんでした。

次のスポットには、パウエル通りをそのまま東へ進み、２４５番地にて止まってください。

10) メイン通りを過ぎ、パウエル通り２４５番地

たった今、ウェストミンスター通り（現在のメイン通り）とパウエル通りの交差点を通過しました。ここは、かつて商業施設が立ち並んでいたエリアになります。住宅街はアレクサンダー通りとコルドバ通り沿いにありました。 パウエル通り 230 番地は、1898 年頃に日本人移民によって買われた最初の物件です。

カナダの外交政策を制定したイギリスの同盟国であるという点で、日本のコミュニティは中国のコミュニティよりわずかにましな立場にありました。日本は戦争でロシアを打ち負かしたばかりで、勢力を拡大している国と認識されていたのに対し、中国は弱く政治的に不安定であると考えられていました。

しかし、中国人のように、日本人は専門職の他、多くの仕事に就くことを禁じられていました。また、街の中で居住禁止とされた場所が多かったのです。映画館やスイミングプールなどの公共の場所は隔離されており、一部のレストランではアジア人、黒人、先住民は立ち入り禁止となっていました。

ウェストミンスター通りとパウエル通りの南東の角にある日本人経営の乾物屋は、千人以上の暴徒の最初の標的でした。石とレンガがひっきりなしに降り注ぎ、建物と商品に 2,400 ドルの損害がありました。

日本領事の森川喜志郎（きしろう）氏は、ベスーン市長に日本のコミュニティを守るための警察出動要請をしようとしていました。しかし、警官の人数は暴徒の人数にかなうものではありませんでした。ゴルフクラブ、ナイフ、銃を使った至近距離での戦いが行われました。建物の屋根からは、岩、レンガ、瓶や角材などがパウエルストリート・グラウンズ（現オッペンハイマー公園）まで侵入してきた暴徒へ浴びせられました。暴徒は、そのような抵抗や損害の増加を予想していませんでした。繰り返された激戦の後、暴徒は離散し始めました。

次のスポットへは、パウエル通りをそのまま東へ進み、南側の道路に渡り、３７４番地で止まってください。

11) パウエル通り３７４番地 11)

このブロックの東端のダンレビー通りには、田村伸吉（しんきち）によって 1912 年に建てられた田村ビルがあります。田村氏は 1889 年にバンクーバーに到着し、日本に木材と小麦を輸出するタムラ・トレーディング・カンパニーを設立し、1907 年に日加合同貯蓄銀行を設立しました。田村氏は、カナダ初の対日貿易事務官でした。

田村ビルは、ニューワールドホテルとしても知られており、その界隈では最も充実した宿でした。後にそこは高橋家によって引き継がれ、またその後、佐々木家の所有となりました。佐々木家はパウエル通り３１８番地にある最大の公衆浴場の一つ、松野湯も所有していました。佐々木家はパウエル通り３14 番地の中華風日本食レストラン富士チョップスィ・ハウスの経営もしていました。ここは日系カナダ人の家族が外食をできる数少ないレストランでした。他の地元レストランは男性のみ入店できたのでした。２階はウェディング用に貸し出しされていました。皮肉なことに、この施設は 1942 年に日系カナダ人コミュニティの強制移住と収容、そして財産の処分を計画するために連邦政府によって使用されました。

１９４１年１２月、日本帝国海軍が真珠湾を攻撃しました。それを受けてカナダ政府は戦争対策法を発動しました。それにより、２万２千人の日系カナダ人は“敵国人”とされ、家を追われ、BC 州内陸部、アルバータ州、マニトバ州、オンタリオ州の労働キャンプもしくは強制収容所に送られました。すべての個人資産、例えば漁船、農場、会社、家などは没収され、持ち主の同意なしに売り払われ、抑留費用に充てられました。戦争が終わってから４年後の 1949 年になってはじめて、日本人は西海岸に戻ることを許されましたが、それまでカナダ政府によりロッキー山脈の東に定住することを強いられていました。

４０年後の１９８８年になりやっと、カナダ政府は賠償を伴う謝罪をしました。

かつて繁栄していた日本街（にほんまち）から日本人コミュニティを強制的に連れ去ったことで、地域は真空状態となりました。市はパウエル街区を工業用地に指定しなおしたことにより、住宅や商業が抑制されて「スラム」が出来上がりました。この事が、今

日この地域で広まっている建物の老朽化、空き部屋、そして社会経済的格差の一因となっています。

次のスポットへは、パウエル通りをそのままダンレビー通りまで東へ進み左折し、アレクサンダー通りまで１ブロック進んでください。そこから右折し、ブロック中央の南側で止まってください。
12) アレキサンダー通り４００番地・日本語学校

今あなたがいるアレキサンダー通りは、もともと木製のブロックで舗装されていました。その頃、バンクーバーには木が豊富にあったからです。この道の名前はリチャード・アレキサンダー氏にちなんでつけられています。ヘイスティング製材所を経営していた彼がバンクーバー初の選挙に立候補した時、従業員である中国人、日本人、先住民族たちを連れて行って彼に投票させようとしましたが、うまく行きませんでした。100年以上前の木造ブロック舗装は、今でもこの地域で見られるものもあります。当時は、路面の寿命を延ばすためにクレオソートで防腐処理がなされていました。１８９０年、バンクーバー市によってこの道路の舗装のための入札が公示された時、関連する仕事に“中国人は決して”雇わないとあからさまに述べられていました。

この地域はかつては「大きな葉のカエデの木」を意味するカム・カマレィと呼ばれる先住民族のためのシーズナルキャンプでした。１８６７年、キャプテン・エドワード・スタンプは後にヘイスティングス製材所となったスタンプス製材所で材木を生産し始めました。

荷上げ場で働いていた多くの船員は先住民でした。ハワイから来たカナカ族の子孫にあたるウィリアム・ナハニーを含む先住民たちには、スタンレーパークに住んでいる者もいました。彼らは、ハドソン・ベイ・カンパニーの為に働いていた人々でした。労働者たちはチヌーク言語の特殊な言い回しを使えたので、仕事中であっても報復を恐れずに労働組合の結成について相談し合うことができました。

アレクサンダー通り439番地の向かいには、日本語学校である日本国民学校がありました。月曜日の早朝、暴徒たちは放火しようとしましたが失敗しました。これは１９０７年の反アジア人暴動において知られている中で最後の暴挙でした。

この学校は、1906年1月12日に木造の校舎を開設したばかりでした。日本の教育カリキュラムに従って、全日制の学校として運営されました。 1919年には、日系カナダ人に英語と日本語の両方を教えることになり、一般科目が取りやめになりました。 1928年に、右側にあるアレキサンダー通り475番地の現在の建物に移転しました。

1942 年の日系カナダ人強制収容の後、学校は閉鎖を余儀なくされました。それから1947 年まではカナダ陸海軍によって接収されました。そののち、学校は Army & Navy デパートに借り受けられました。学校は一時的にバンクーバー仏教教会の管理下に置かれましたが、1952 年まで再開しませんでした。今日では、学校は国定史跡であり、バンクーバーの日系カナダ人コミュニティにおいて欠くことのできない存在となっています。

次のスポットへは、アレキサンダー通りをそのまま東へジャクソン通りまで進み、右折してからパウエル通りまで 1 ブロック行ってください。パウエルを渡って右側に向き、そのブロックの南側、中心付近で止まってください。

13)オッペンハイマー公園（パウエルストリート・グラウンズ）

南側にあるのがオッペンハイマーパークです。パウエルストリート・グラウンズ、または日本語でパウエル・グラウンドとして 1898 年に作られました。ここは伝説の野球チーム「朝日」の本拠地でした。1887 年にスタンレーパークとなった場所に住んでいた先住民たちは、居心地が悪くなってこの公園に移動し、ここを安住の地としました。

1936 年に、パウエルストリート・グラウンズは、集会やデモンストレーションが許可された唯一の場所として市の指定を受けました。長年にわたり、失業、貧困、人種差別と闘うために多くの人々がここに集まりました。大恐慌の間、千人のホームレス達が公園を囲む一帯でキャンプを張っていたことは、バンクーバーが今日直面している住宅危機を思い起こさせます。

９月９日の月曜日の朝になり、土砂降りの天気も手伝い、ようやく暴動が静まりました。中国慈善協会とクラン協会が水曜日の朝まで続くゼネストを組織したため、製材所やレストランの三分の一を含む、多くのバンクーバーの地域が閉鎖されました。日本人達は月曜日に仕事に行きましたが、パウエルストリートグラウンズでの住民会議に出席するために午後には仕事を切り上げ、市への賠償請求について話し合いました。ベスーン市長は、群衆の懸念に取り組むようになりましたが、皮肉にも彼はアジア人排斥連盟の共同創設者の一人でした。

日本人と中国人のコミュニティは、損害賠償の支払いを政府に請願（せいがん）しました。チャイナタウンのビジネスは最長 6 日間も閉鎖されたのです。中国慈善協会は以下の支援を行いました：

> 元の職場に戻った時にもし雇用主があなたを雇わず代わりの人を雇用しようとした場合は、当協会に報告してください、私たちがあなたに代わって交渉します。

また、“西洋人に暴力を振るわれたら、当協会に報告して下さい。私達がその人達と交渉します。”とも表明しました。

オタワ連邦政府は、王立委員会の調査を行うために、連邦労働副大臣 William Lyon Mackenzie King 氏を派遣しました。日本がイギリスに圧力をかけたことで迅速に対応は進み、９千ドルを超える損害賠償が日本街に対して決済されました。中国人に対する賠償は時間がかかりましたが、合計でおよそ２万７千ドルになりました。

興味深いことに、Mackenzie King 氏の調査によって中国人の賠償請求の一部はアヘン関連事業に対するものであったことが分かり、最終的には、これがカナダで最初に麻薬を禁止する法律を制定することにつながりました。

1909 年、ハーバード大学は Mackenzie King 氏に「カナダへの東洋移民」に関する論文の博士号を授与しました。論文中で、彼は次のようにアジア人移民に対して主張しました：

> カナダは白人の国であり続けるべきなので、東洋移民を制限したいというのはしごく当然のことである。またそれは、経済的および社会的な理由から望ましいだけでなく、政治的および国内的な理由からも極めて必要であると考えられる。

その後の第二次世界大戦中に Mackenzie King 氏が首相であったとき、日系カナダ人に強制収容を命じたのは、まさに彼だったのです。

1907年の暴動の後、日本とカナダは、日本人の移民を年間四百人に減らすという「紳士協定」を結びました。 1928年には、さらに150人に減らされました。

1908年には、南アジアからの人々は、「直行便によって到着した者のみが移住できる」という法律の標的とされていました。１９１４年、駒形丸に乗ったインド人たちが横浜を経由して入国しようとした時、この法律が適用されることになりました。

中国人の人頭税は500ドルのままでしたが、1923年には中国人排斥法が施行され、１９４７年になるまで廃止されませんでした。中国人排斥法の廃止は、第二次大戦後にカナ

ダが国連人権憲章に加盟したことが大きく影響しました。

バンクーバー市、ブリティッシュコロンビア州、そしてカナダ全土に、法的および社会的差別の長い歴史があります。1907年に起こった反アジア人暴動の標的となったコミュニティの足跡を通じて、私たちは現在でもそれを知ることができるのです。